

# 生産と「消費」の矛盾（いわゆる内在的矛盾）について（後編）

——その基礎的考察とレーニンの見解の検討——

水 谷 謙 治

前編 生産と「消費」の矛盾に関する基礎的考察

序

第一節 生産力の無制限的發展傾向と「消費」を制限する傾向

第二節 二つの傾向の矛盾

第三節 生産と「消費」の矛盾といわゆる「再生産論」との関連（以上第三四卷 第二号所載）

後編 生産と「消費」の矛盾に関するレーニンの見解について

第一節 概観（ロシア資本主義論争との関連）

第二節 生産と「消費」の矛盾に関するレーニンの見解

〔I〕 ナロードニキ批判における見解

〔II〕 合法マルクス主義者批判における見解

第三節 レーニンの見解の検討（以上本号所載）

生産と「消費」の矛盾（いわゆる内在的矛盾）について（後編）

後編 生産と「消費」の矛盾に関するレーニンの見解について

第一節 概観——ロシヤ資本主義論争との関連——

本編では、前編の生産と「消費」に関する基礎的考察にもとづいて、この問題に関するレーニンの諸論述を検討する。まず、彼がこの問題をあつかうようになった諸事情を明らかにするために、当時のロシヤの経済的状态および九〇年代におけるロシヤ資本主義論争についてごく簡単にみておくことから始めよう。

一

九〇年代のロシヤは、まだ圧倒的に農民の国であり、農業においては地主的大土地所有制が優勢であった。しかし工業では、木綿工業を中心にして、九〇年までにほぼ資本主義が成立している。そして九〇年代には、鉄道を起動力として重工業化がすすみ、資本主義も急速な発展をとげる。

九〇年代は史上空前の大飢饉（九一—九二年）と、資本主義の急成長を促進したウィッテ蔵相の就任で始まった。二年間にわたる大飢饉は、ウィッテの政策とあいまって、膨大な出稼ぎや難民を生みだしたり、農民を極度に窮乏化させたりして、多方面に大きな衝撃をもたらしたが、それはまた、ロシヤ経済への危機感とマルクス経済学への関心を喚起し、ロシヤ資本主義論争の本格化をうながすインパクトにもなった。<sup>(1)</sup>

ウィッテは、大規模な鉄道建設（たとえばシベリア横断鉄道）を起動力にして、資本主義を急成長させる諸政策を

実施させていった。これらに要する資金は、主として外債と農民への重税によってまかなわれた。こうして一方では、鉄道、冶金、石油、繊維、商業部面で資本主義が急速に発展し、他方では、鉄道網を通して農民生活と商業との結合、労働力の移動が促進され、農民層分解がすすんでいった。

九〇年代後半になると、資本主義の発達に照応して、労働者の大規模なストライキ運動が増加、拡大し、この運動へのマルクス主義者の影響も大きくなっていく。ロシア社会民主労働党の第一回大会が開かれたのは、一八九八年であつた。

ところで、レーニンが生産と「消費」の矛盾を論じたのは、ロシア資本主義論争の過程においてである。ここでいうロシア資本主義論争とは、農民改革（一八六一年）後のロシア経済の発展をどう評価し、その将来をどのようにみるかという、いわば「ロシア資本主義の運命」をめぐって八〇年代後半から九〇年代末期にかけて行われた論争のことである。<sup>(2)</sup>この論争は、ナロードニキ経済学者と、いわゆる「マルクス主義者」——合法マルクス主義者と社会民主主義者——とのあいだで、また後者のあいだで行われた。前者ではヴォロンツォフ（筆名ヴェ・ヴェ）とダニエリソン（筆名ニコライ・オン）、合法マルクス主義者ではストルーヴェ、トゥガン・バラノフスキー、ブルガコフ、社会民主主義者ではブレハーノフとレーニンらがよく知られている。

(1) 田中真晴『ロシア経済思想史の研究』（ミネルヴァ書房）では、こうした点がストルーヴェ、ダニエリソンの証言にもとづいて明らかにされている（同書、第七章）。

(2) 最近におけるロシア資本主義論争の諸研究のなかでさしあたり注目すべき著書として、田中真晴氏の前掲書、和田春樹『マルクス・エンゲルスとロシア革命』（頸草書房）、ヴァリツキ『ロシア資本主義論争』（ミネルヴァ書房）等をあげることができる。

生産と「消費」の矛盾（いわゆる内在的矛盾）について（後編）

四四

(3) ナロードニキの政治運動として有名なのは、一八七〇年中葉の「ヴィ・ナロード運動」や一八八一年の「人民の意志派」によるツァーリ（アレクサンドル二世）暗殺である。しかしここでは、広い意味でのナロードニキ主義をば、政治運動というよりも一八六〇年初頭から一九〇〇年にかけての、ロシアにおける巨大な思想的潮流——後発ロシアからする先進西欧資本主義への批判的態度とそれに根ざしたロシア独自の社会主義的（本質上では農民民主主義的）志向とを特徴にした思想的潮流——ととらえておく。ゲルツェン、チエルヌイシエフスキーをその先駆とすれば、ヴォロンツォフとりわけダニエリソンは、その経済学的見解の完成者といつてよいであろう。

## 二

主観的にはマルクスを支持し、国内市場の不足と外国市場における立遅れからロシア資本主義の没落を最初に主張したのは、ナロードニキ経済学者ヴォロンツォフである。

機械生産は急速に増大するが、それに応じて賃銀は上昇せず、資本家も労働者の消費をこえる剰余分を全部消費できないう、しかも機械生産で破滅させられた多数の独立生産者は、雇用の機会を見出しえない。したがって、国内需要は生産拡大に立遅れ、商品過剰が生ずるので、外国市場が不可欠になる。しかし対外的な競争においては、後進ロシアは制限されている。かくしてロシア資本主義は没落の運命にある——。彼は、著書『ロシア資本主義の運命』（一八八三年）と、論文「市場における商品の供給過多（一八八三年）」において、以上のように主張したのである。

彼の主張には、二大部門における総資本の実現という視角は皆無である。市場不足説も素朴な過少消費説でしかない。（もっとも、当時は『資本論』も第一部しか出ていなかった）。

マルクスの、生産と「消費」の矛盾に関する命題や「再生産論」を、ロシア資本主義分析に利用し、論争を本格化

させたのはグニエリソンであった。彼は、『資本論』全三巻の訳者としても、たび重なるマルクス、エンゲルスとの文通者としても知られている。主著『わが国の改革後の社会経済概要』<sup>(5)</sup>(一八九三年)は、ロシヤでの最初の本格的な資本主義分析の書であり、当時のマルクス主義的思潮に大きな影響をおよぼしたといわれる。その論旨はおおよそつぎのようなものであった。

年間生産物中の可変資本部分は、労賃を圧下させようとする資本の作用や、生産性の増大にともなう雇用労働者の減少(過剰人口の増加)によって限制される。剰余価値部分も、その全部は資本家階級の個人的消費によっては実現できない。なぜなら、その一部は蓄積されるし、また蓄積の発展にともなう生産手段部門の急速な成長が生じ、消費手段の大量生産(この面でのMの増大)が行われるからである。他方、鉄道を基軸とする資本主義の発展は、農民を市場に結びつけることによって彼らの貧困化をもたらし、その面でも国内市場を縮小させる。かかる人民大衆の貧困化は、資本主義がその発展において生み出す自分自身への障害であり、自己の基本的矛盾に根ざすものである。こうした困難からの活路は、これを外国市場にもとめるほかはない。しかし、後進ロシヤは他国との競争におくれをとるので、その発展は重大な危機に直面せざるをえない。だからロシヤは資本主義的発展の道ではなく、農村共同体に依拠した社会主義への道を志向すべきである。<sup>(6)</sup>

彼はこうした見解を、ロシヤ経済の諸資料の分析および『資本論』とマルクス、エンゲルスからの書簡のおびただしい引用等に依拠して主張したのであった。

なお、彼は、生産力の増大に対応する労賃部分の減少を国内市場縮小の一因として説くさいに、生産と「消費」の矛盾にかかわる『資本論』の命題(第二部第二篇、注三三)を利用して<sup>(7)</sup>いる。彼は、この「矛盾」を、生産力の上昇に

対する制限された消費との矛盾、資本家的生産および流通の諸形態と現存の生産力との矛盾として——事実上で資本主義的生産様式の基本的矛盾のありかたとして——とらえ、資本主義が自らの発展で生み出した自己への「障害」だとのべている。<sup>(9)</sup>

こうしたナロードニキの主張に対して、「マルクス主義者」たちは、ナロードニキの市場理論を、資本主義の発展におよぼす不変資本部分の役割の看過という点から批判し、ロシヤにおける資本主義の必然的發展を主張した。

彼らの一方は、合法マルクス主義者と呼ばれるグループであったが、彼らはヴィッテの資本主義的諸政策を支持し、多くが革命運動に参加せず合法的職業につき、合法的出版物に自分たちの見解を発表していた。ストルーヴェがロシヤの資本主義的發展を支持し、*「われわれには文化が不足しているから資本主義の学校に行こう」*とのべて、ナロードニキや革命的青年から「ブルジョアジーの手先」と呼ばれたことはかなりよく知られている。<sup>(10)</sup>

「マルクス主義者」の他方のグループは、社会民主主義者であった。彼らのナロードニキ批判は、ヴォロンツォフのいわば「没落論」と対照的な「発展論」と呼ぶうるかたちで、ブレハーフによって八〇年代の後半から行われた。九〇年代に入り、論争が本格化するとともにレーニンが登場し、経済理論とロシヤの経済分析への適用という面が主要な役割を果すようになる。

(4) B. B. [B. П. Воронцов]. 《Судьбы капитализма в России》 СПб., 1882. (『ロシヤにおける資本主義の運命』) この著書にみられる資本主義没落論の論旨は、松岡保氏の論文「ナロードニキのロシヤ資本主義論」に手際よくまとめられている（桑原武夫編『ブルジョア革命の比較研究』八筑摩書房〈所載〉）。

(5) Николай-Онь (Н. Даниельсон) 《Очерки нашего пореформенного общественного хозяйства》 СПб., 1893. 東大社研にある本書のコピーをみるにあたって、和田春樹氏の好意をえた。記して謝したい。

(6) Там же, стр. 126-128, 201-206, 338-345.

(7) 「われわれは今や資本主義的生産の発展においては……新たに生産された全生産物のうち、労働者階級に向けられるべき生産物が必然的に減少せざるをえないことを理解する。またこれと同時に、つぎのこと——資本主義はそれ自身として自己の発展を掘りくずす要素要素を含んでいること、労働者の分け前を減少させ、正にそのことによって自己に固有の国内市場を縮小させること——を知るのである。『労働者は商品の買手として市場にとって重要である。しかし、彼らの商品——労働力——の売手としては資本主義社会はその価値を最低限に制限する傾向がある』(『Там же, стр. 178』)。

(8) Там же, стр. 345.

(9) Там же, стр. 203.

(10) А・Варитцки前掲書、二三六ページ。なお、レーニンもストルヴェとはまったく違った観点からではあるが、「望むべきことは、資本主義の発展をおさえることではなく、反対にそれを完全に発展させること、最後まで発展させることである」とのべている。《Ленин сочинения》1953, издание четвертое, стр. 451 (『レーニン全集』第四版(大月書店)、訳、五一〇ページ。以下で引用するレーニンの叙述はすべて右全集からのものとし、単に『全集』と略記する。訳本も右大月版とする。ただし、訳し方は多少修正してある)。

### 三

レーニンは、ロシヤの、特に農業の経済的諸事実の分析にもとづいて、ナロードニキにおける階級的な観点の欠如と、『資本論』の誤った理解とを批判した。当時のレーニンにとって緊要なことの一つは、社会民主労働党綱領の理論的基礎を提示することであり、そのために、ナロードニキなかならずダニエリソンのロシヤ資本主義分析に対して、彼の階級的な資本主義分析を対置することであった。

ナロードニキとの論争にともない、九〇年代中葉から後期にかけて、合法マルクス主義者のあいだでも、また彼らとレーニンとのあいだでも、「再生産論」の理解、とりわけ生産と「消費」の矛盾に関する理解をめぐって論争が行

生産と「消費」の矛盾(いわゆる内在的矛盾)について(後編)

われた。レーニンは、ナロードニキ批判にさいしてもこの「矛盾」に言及しているが、合法マルクス主義者たちとの論争において、これをより積極的に正面から論ずるようになる。

「矛盾」に関する論文を含む彼の著述と論文には、つぎのものがある。

- A 「いわゆる市場問題について」（一八九三年）
  - B 「経済的ロマン主義の特徴づけによせて」（一八九七年）
  - C 「ロシアにおける資本主義の発達」（一八九六―一九九年）
  - D 「市場理論の問題への覚え書」（一八九八年）
  - E 「ふたたび実現理論の問題によせて」（一八九九年）
  - F 「ペ・ネジダーノフ氏への回答」（一八九九年）
  - G 「プロコボヴィチ『西欧における労働運動』の書評」（一八九九年）
- これらの叙述は、ナロードニキと合法マルクス主義者とを批判するべく書かれたものであり、その点ではロシア資本主義論争の一環をなすものといつてよい。
- ところで、これらの叙述は、そのほとんどが「再生産論」に関する問題を重要なテーマにしている。「再生産論」がこのように重視されたのはなぜかといえ、ナロードニキ経済学者たちのロシア資本主義論では、市場問題が最も重要な地位をしめていたからであり、その批判にさいしては、「なによりもまず、『市場理論』の基本的な抽象的、理論的諸点を説明する必要がある」と考えられたからである。そして、生産と「消費」の矛盾が「再生産論」との関連でとりあげられたのは、一方で、ナロードニキ（とくにダニエリソン）におけるこの問題の誤った理解が「再生産



論」の無理解と結びついていると考えられたからであり、他方では、この関連の無理解からマルクスやレーニンを批判した合法マルクス主義者たちに対しても、反論や批判が必要だと考えられたからである。

したがって、生産と「消費」の矛盾に関するレーニンの諸論述は、さしあたり二つに大別することができる。一つは、ナロードニキ批判のばあいであり、もう一つは、合法マルクス主義者批判のばあいである。つぎに節をあらためて、二つのばあいにおけるこの「矛盾」に関する彼の諸論述をみていくことにしたい。

(II) 『全集』第四卷、四一ページ(訳、五一ページ)。

なお、「論争」を概観するための一助として、当面の視角から重視すべき一八八〇年——九〇年代の著述をあげておこう。

一八七二 (ダニエリソン) 「資本論」第  
一部ロシア語訳

一八八〇 ダニエリソン「改革後の我国社  
会経済概要」(I)

八二 ヴォロンツォフ「ロシアに於る  
資本主義の運命」  
ユジャコフ「ロシアに於る農業  
生産の諸形態」

八三 ヴォロンツォフ「市場に於る商  
品の過多」

八四 チホミーロフ「我々は革命から  
何を期待しうるか」

八五 (ダニエリソン) 「資本論」第  
二部ロシア語訳

八九 ヴォロンツォフ「軍国主義と資  
本主義」

ジーベル「ロシアに於る資本主義」

(プレハーノフ) 「共産党宣言」ロシ  
ヤ語訳

プレハーノフ「社会主義と政治闘争」

(ザスーリチ) 「空想から科学へ」

ロシア語訳

プレハーノフ「我々の意見の相違」

ジーベル「リカードとマルクス」

生産と「消費」の矛盾(いわゆる内在的矛盾)について(後編)

生産と「消費」の矛盾（いわゆる内在的矛盾）について（後編）

一八九三

ダニエリソン「改革後の我国社会経済概要」(統)

ユジャコフ「ロシアの経済的發展の諸問題」

九四 ミハイロフスキー(マルクス主義批判)

ダニエリソン「我国経済的發展の諸条件」

九五 ヴォロンツォフ「理論経済学概要」

九六 (ダニエリソン)「資本論」第三部ロシア語訳

九七

九八

九九

ストルーヴェ「ロシアの経済的發展：批判的覚書」

トゥガン「近代英国恐慌史論」

ブルガコフ「資本家的生産下での市場について」

トゥガン「過去と現在に於るロシア工場」

ストルーヴェ「資本家的生産下での市場：問題」

ネジダーノフ「資本家的生産下での市場問題」

レーニン「いわゆる市場問題によせて」

レーニン「人民の友とは何か」

レーニン「ナロードニキ主義の経済学的内容」

プレハーノフ「史的一元論」

(レーニン、「ロシアに於る資本主義の發達」に着手)

レーニン「経済学的ロマン主義の特徴づけ」

レーニン「市場理論の問題への覚書」

レーニン「再び実現理論の問題によせて」

レーニン「ベ・ネジダーノフ氏への回答」

レーニン「ロシアに於る資本主義の發達」(出版)

## 第二節 生産と「消費」の矛盾に関するレーニンの見解

### 〔I〕 ナロードニキ批判のばあい

このばあいの生産と「消費」に関する諸論述は、さきに列挙した諸論文や著作のうち、主としてA、B、Cに含まれており、時期的には、ほぼ一八九三年から九六年にかけて書かれたものである。

まず最初のものは、「いわゆる市場問題について」のなかにみいだされる。右の論文は、ナロードニキの市場理論を批判しようとしたクラシンの報告の検討にあてられたものである。この報告でクラシンは、生活手段部門に対する生産手段部門の独立性を論拠にしつつ、人民が貧困化していても市場は発展しようとのべてナロードニキに反論した。これに対してレーニンは、いわゆる有機的構成高度化表式を利用して、第一部門の独立性の意味と意義を明らかにしつつ、「再生産論」は資本主義の全面支配を前提しているから右の独立性によつてはロシア資本主義の発展の可能性という問題には答えられない、その答えは、ロシアにおける農民層分解という事実にもとめねばならない、と主張した。いわゆる市場問題についてのレーニンのナロードニキ批判におけるポイント<sup>(12)</sup>は、右の点にある。

生産と「消費」の矛盾に関するつぎの叙述は、「生産手段の最も急速な増大という法則」に関する結論への「補足」としてのべられたものである（ゴチックは水谷）。

引用1「第一に、前述のことは（生産手段の最も急速な増大という法則の意義は機械労働による手労働の代置が生産手段の

生産と「消費」の矛盾（いわゆる内在的矛盾）について（後編）

生産発展を要求し、総生産のなかで機械とその原料がより大きな地位をしめることにある、ということ——水谷）、マルクスがつぎの言葉でかたっているあの『資本主義的生産様式における矛盾』を、すこしも否定するものではない。『商品購買者としての労働者は市場にとって重要である。だが、彼らの商品——労働力——の販売者としては、資本主義社会は、労働力を最低価格に制限する傾向がある』（……）。……資本主義社会では、消費資料を生産する社会的生産のあの部分もまた、増大しないわけにはいかない。生産手段の生産の発展は、前記の矛盾をすこし先へのばすだけであって、それを絶滅するものではない。その矛盾は、資本主義的生産様式そのものの排除とともに始めて排除されるのである。しかし、自明のことだが、この矛盾のうちにロシヤにおける資本主義の完全な発展に対する障害をみることは（これはナロードニキが好んでするところであるが）、まったく馬鹿げたことである。しかし、このことは図式（六人の生産者を例にとった市場の発展を示す図式——水谷）によって、すでに十分に説明されている<sup>(13)</sup>」。

つぎの引用文2は、西欧ロマンチズムとナロードニキ主義との関係をあつかった論文「経済的ロマンチズムの特徴づけによせて」の「第一章 ロマンチズムの経済理論、五、資本主義社会における蓄積」にみられる叙述であり、引用文3は、同章「七、恐慌」にみられる文章である。

引用2「……蓄積は所得以上にでる生産の超過だということ、——これは、実際にまったく現実に対応しており、資本主義に固有な矛盾を表現している。この超過はあらゆる蓄積のばあいには必要なのであるし、そしてこの蓄積は、消費資料にとつてそれに照応した市場の増大がなくても、また市場が縮小するばあいには、生産手段のために新たな市場をひらくのである。……／＼それに照応した消費の発展なしに行われる、社会の生産力の発展ということ、は、もちろん矛盾である。しかしそれは、正に実際に存在する矛盾であり、またそれは、資本主義の本質そのものか

らでてくるものであって、感傷的な文句によって言をそらすことのできないものである<sup>(14)</sup>。

引用3 「……H・オン氏は、『国内市場の縮小』について、また『人民の消費能力の低下』について（これが彼の見解の中心点である）論じながら、なおかつ、……生産と消費との矛盾という事実、不十分な消費という事実を確認している人たちを引合いにだしているのである。もちろん、こんなふう引合いにだすことは、不適切な引用をするという、この著者にとって一般に特徴的な能力を示すだけであり、それ以上のものではない。たとえば、彼の『概要』を知っている読者なら誰でも、……彼の「引用」（例の注三二前半部分——水谷）を、きつとおぼえているであろうし、またH・オン氏が『国内市場の縮小』をも（……）、恐慌をも（……）ここから結論づけようとしていることを、おぼえているであろう。しかし、わが著者は、この文章（……）を引用しながら、なおかつ、この引用文をとりだしたその脚注の末尾のところをぬかしているのだ。／（その引用文の問題は——水谷）、シスモンディを反論している『編で始めて』、すなわち、資本家は剰余価値を実現することができるということ、また外国貿易を実現の分析にもちこむことは不合理だということが示されている『編で始めて』とりあつかわれるものである……」<sup>(15)</sup>。

引用4 は、著書『ロシアにおける資本主義の発達』第一章「六、マルクスの実現理論」にみられるものである。レーニンは、「実現理論からでてくる主要な結論」として、「国内市場の発展は消費資料の増大によるよりも、むしろ生産手段の増大によって行われる<sup>(16)</sup>」と指摘したあと、つぎのようにのべている。

引用4 「資本主義に特有な、生産の拡大に対する無制限の志向と、人民大衆の制限された（……）消費とのあいだには、疑いもなく矛盾がある。ほかならぬこの矛盾を、マルクスは、ナロードニキが国内市場の縮小とか、資本主義の非進歩性とか、等々いう彼らの見解を立証するものであるかのように、好んであげるあの諸命題のなかで、確認し

ているのである。ここに、これらの命題のうち、いくつかのものをとりあげよう（引用文を省略——水谷）。これらすべての命題のなかでは、生産を拡大しようとする無制限の志向と、制限された消費とのあいだの前記の矛盾が確認されているのであり、それ以上のなにもでもない。『資本論』のこれらの箇所から、あたかもマルクスが資本主義社会における剰余価値の実現の可能性をみとめなかったように、また、彼が恐慌を過少消費によって説明したかのよう結論するほど、不条理なことはない。マルクスの行った実現の分析は、『不変資本と不変資本とのあいだの流通が……終極においては個人的消費によって制限されている』（……）ことを示した。しかし、この同じ分析は、この『制限』の真の性格を示し、国内市場の形成においては消費資料が生産手段にくらべてより小さな役割しか演じないことを、示した。だから、資本主義の諸矛盾からその不可能とかその非進歩性、等々を結論することほど、馬鹿げたことはいであらう」<sup>(17)</sup>。

(12) 『全集』第一巻、九三—九四ページ（訳、一〇六一—一〇七ページ）参照。

(13) 同第一巻、八九—九〇ページ（訳、一〇二—一〇三ページ）。

(14) 同第二巻、一四—一五ページ（訳、一四二—一四三ページ）。

(15) 同第二巻、一四九—一五〇ページ（訳、一五一—一五二ページ）。

(16) 同第三巻、三二—三三ページ（訳、三一—三二ページ）。

(17) 同第三巻、三四—三六ページ（訳、三三—三五ページ）。

二

一、でみてきたように、この問題に関するレーニンの論旨は、資本主義社会では生産手段の最も急速な増加が行わ

れ、市場の形成においても消費資料は生産手段よりも小さな役割しかはたさない、照応的な消費の発展なしに行われるこうした生産力の発展は矛盾であるが、それは資本主義の本質に根ざした実生活の矛盾であって、国内市場の縮小とか、資本主義的發展への障害ではない、というものである。

諸引用文のゴチック部分を想起していただきたい。この問題に関する批判の的は、「矛盾」を發展への障害とみる見解に向けられていることがわかる。なぜなら、ナロードニキの（ヴォロンツォフ流）資本主義没落論の基本は、右の「矛盾」を市場不足と人民の貧困——いわば広い意味での生産と消費との不一致——から説き、この矛盾を資本主義的發展への障害とみることにあったからであり、また彼らは、資本主義に内在的な諸矛盾を階級的歴史的にとらえることなく、それらを感傷的な文句で片づけようとする傾向を有していたからである。

この問題に関して、レーニンの論述がダニエリソンに多くさかれているのは、彼がナロードニキ中で最も高い水準にあり、始めて生産と「消費」の矛盾を『資本論』に即してとりあげようとしたからであろう。彼に対する直接的批判は、たとえば、引用文2、3にみられるとおりである。そこでは、過少消費説的理解にもとづく引用の仕方の不当性が批判されている。引用文1、4その他の論述は、彼をふくめたナロードニキ全体への批判とみなしうる。

ところで、レーニンの当時のこうした諸論述は、生産と「消費」の矛盾を固有のテーマとして解明したものとより、彼らの市場不足論の基本的批判を補足し、注意したものといえる。つまり、市場不足論を農民層分解の無理解や生産的消費の看過という点で批判したのちに、生産手段の急速な増大は、生産と「消費」の矛盾を示すものだが、それは実在的で本質的な矛盾であり、發展への障害にはなりえないことを注意しておく、というものである。それと、いうのも、ナロードニキの市場不足論の土台は、大多数をしめる農民の貧困化におかれ、レーニンによる批判も、主

としてこの点に向けられたからである。このさいには、発展した資本主義の「矛盾」や「再生産論」に関する問題は、第二義的なものになる。ただし、後者は資本主義的支配の前提上での問題であり、大多数をしめる農民の貧困化のもとして、ロシヤ資本主義の発展は可能かという問題には答えられないのであって、その答えは農民分解という事実の分析にもとめねばならないと考えられたからである。しかも、九三年当時、『資本論』に即して生産と「消費」の矛盾に言及したのはダニエリソンだけであり、その彼にしてからが当時はまだ、「第三部」における「矛盾」の叙述を見知して<sup>(18)</sup>おらず、せいぜい、「第二部」の「注三二」を「第三部」を知らないままで引用したのとどまっていたからである。レーニンにあって、「矛盾」が「再生産論」や「第三部」との関連において正面からとりあげられるようになるのは、彼が合法マルクス主義者を批判し、彼らと論争するようになってからである。

なお、「第三部」をみていなかったダニエリソンは、『概要』においては、生産と「消費」の矛盾を主として「第一部」の蓄積法則や、エンゲルスの『空想から科学』に即して理解していた、つまり、事実上で資本家的生産様式の基本的矛盾のありかたとしてとらえていた、と思われる。このことは、彼が『空想から科学』における基本的矛盾の叙述の一部分を引用しつつ、「社会化された生産と生産物の私的所有との矛盾」を説明する一方、「資本主義的生産と流通の諸形態と現存せる生産力との矛盾」から、「この諸形態に制限された需要が社会の生産力を超過する」とのべていることにも示されているといえよう。<sup>(21)</sup>彼の真意は、基本的矛盾が、一方では労賃部分の減少として、他方では農民の支払能力ある需要の減少としてあらわれ、こうした消費制限が発展への障害をなすから、この解決は基本的矛盾の排除・農民的社会主義への移行にある、と主張せんとしたところにあつたのであろう。ついでにいうと、彼は、消費資料生産（部門）に対する生産手段生産（部門）の主導的役割を強調し、「だからこそ、資本主義的生産の主要な動機



は個人的消費などという誤った見解は、何の価値もない」とのべている。<sup>(22)</sup>

こうしたダニエリソンの主張は、他のナロードニキとくらべる限りでは、理論的にみて数段高い水準にあったと評価できる。したがって、生産と「消費」の矛盾に関しては、また資本主義の批判に関しても、彼を他のナロードニキと同水準におき、シスモンディ的なロマン主義者という側面でのみ評価することには、少くとも今日の学史的な視点からする限り疑問をいだかざるをえない。<sup>(23)</sup>

(18) ダニエリソンが「第三部」の最初の部分を送付されたのは、一八九四年である（一八九四年三月二〇日付、エンゲルスからダニエリソンへの手紙）。また彼によってロシヤ語「第三部」が公刊されたのは、一八九六年である。

(19) M. E. Werke, 20. s. 250-251 (訳、二七八ページ)。

(20) "Очерки" стр. 304.

(21) Там же, стр. 345.

(22) Там же, стр. 204-205.

(23) レーニンにも、時としてこうした扱い方がみられるように思われる。それは彼の論文の性質上、やむをえなかった点もあるが、ただ、今日、ロシヤにおける経済理論の学説史的研究を行うさいには、ダニエリソンの諸論述を全体としてとりあげ、ナロードニキ主義者たちのなかで彼が占める地位をより明確にすべきであろう。

## 【II】合法マルクス主義者批判のばあい

このばあいの諸論述は、ほぼ一八九六年から九九九年末までのもので、前掲論文C——Gにふくまれている。

トゥガンーバラノフスキーやストルーヴェは、いわゆる「再生産論」を、部門間の均衡関係の解明だと考え、『資本論』「第三部」第五章における、生産と「消費」の矛盾に関する叙述とは相反するものと主張し、マルクスやレーニンを批判した。たとえば、トゥガンはつぎのようについて、

生産と「消費」の矛盾（いわゆる内在的矛盾）について（後編）

「実現の第一条件（社会的生産の比例性——水谷）の仮定は……社会的資本の再生産に関する分析とまったく一致する。しかし、この分析は第二条件（社会の消費力——水谷）の指摘と真向から矛盾している。／……マルクスは、販売不振の、二つの独立した原因として、比例性の欠如と社会の消費力不足とを対置することによって、みずからシスモンディの過少消費説の信奉者たることを告白している」<sup>(24)</sup>。

レーニンの論文「市場理論の問題への覚え書き」は、こうしたトゥガンへの反批判にあてられたものである。この論文で彼は、社会の消費力と部門間の比率性は無関係であるどころか、「消費の一定の状態は均衡性の一要素である」と指摘し、実現理論はトゥガンの主張とは逆に、生産と「消費」の矛盾を否定せず、それらの関連を明らかにしていること、そして、「第三部」ではこの「矛盾」が確認されているにすぎない、と主張したのである。<sup>(25)</sup>

ストルーヴェも、トゥガンと同じ見地からレーニンを批判した。レーニンは、「第二部」でも「第三部」でも「矛盾」が強調されているとのべている点で、生産と消費との調和の理論「生産物の均衡的配分の理論たる実現理論をすて去ってしまうことになる、というのである」<sup>(26)</sup>。これに対してレーニンは、ストルーヴェこそ、実現理論を生産物の均衡的配分の理論と誤解していると批判した。

引用5 「抽象的実現理論は、資本主義的生産の種々の部門間における生産物の均衡的配分を想定……しなければならぬ。しかし、……実現理論は、資本主義社会では生産物がつねに均衡して配分されているとか、されうるなどは、決して主張しない」。「注」 「抽象的な実現理論をとる限り……実現が可能だという結論は不可避である。しかし、抽象的理論を叙述しながらも、実際の実現過程に固有な矛盾を示すことは必要である。私の論文ではこれが示されている」<sup>(27)</sup>。

つぎの二つの引用文は、論文「再び表現理論の問題によせて」にみられるものである。(ゴチックは水谷)。

引用6 「マルクスの実現理論が絶大な科学的価値をもっている理由は、ひとつには、それがこの矛盾(生産と「消費」<sup>(28)</sup>との矛盾——水谷)がどのようにして実現されるかを示し、またこの矛盾を前面におし出しているからにはかならない」。

引用7 「マルクスの理論の科学的価値は、その理論が社会的総資本の再生産と流通との過程を解明したことにある。さらにまた、マルクスの理論は、生産の巨大な増加がそれに照応する人民の消費の増加を伴わないという、資本主義に固有な矛盾が、どのように実現されるか、ということをも示した。だから、マルクスの理論は、ブルジョア的「弁護論的な理論を復活(ストルーフエはこう夢想したのだが)しないばかりでなく、逆に、弁護論に対して最も強力な武器を与えているのである。この理論からは……均衡のとれた再生産と流通が行われるばあい<sup>(29)</sup>でさえ、生産の増加と消費の制限された限界とのあいだの矛盾は不可避だという結論が出てくる」。

同様の主旨の主張は、論文「ペ・ネジダーノフ氏への回答」にもみられる。(リプキンハ筆名、ペ・ネジダーノフは、「矛盾」自体を否定してしまうことよってレーニンを批判したのである。<sup>(30)</sup>)

合法マルクス主義者間での論争や彼らとレーニンとの論戦は、ロシア資本主義論争における派生的部分をなしていたといえるであろう。それは、「ロシア資本主義の運命」をめぐる論争での共通した論敵との論戦過程で、「マルクス主義者」内部で生じてきたものであって、論争のテーマも、いわゆる「再生産論」の理解、特に「再生産論」に対する生産と「消費」の矛盾に言及した「第三部」の叙述との関連という、純理論的で限定されたものであった。だが、そうであったとはいえ、レーニンにとっては、このテーマに関する『資本論』への誤解や曲解を正しておくことは、

生産と「消費」の矛盾(いわゆる内在的矛盾)について(後編)

自分に対する批判の火の粉を払ううえでも、また『資本論』をロシア資本主義分析の理論的指針にするうえでも、欠かせない仕事であったといえよう。

- (24) Туган-Барановский «Промышленные кризисы в современной Англии, их причины и влияние на народную жизнь» (1894), しかし「このロシア語版は入手しえなかつたので、ドイツ語版の邦訳（救仁郷繁訳、『近代英国恐慌史論』二一八ページ）をもちいた。
- (25) 『全集』第四卷、四四—四六ページ（訳、五五—五六ページ）。
- (26) 同第四卷、五九、六七ページ（訳、七四、八五—八六ページ）。
- (27) 同第四卷、六二ページ（訳、七七—七八ページ）。
- (28) 同第四卷、六九ページ（訳、八八ページ）。
- (29) 同第四卷、七一ページ（訳、九一ページ）。
- (30) 同第四卷、一四二ページ（訳、一七三ページ）。

### 第三節 「矛盾」に関するレーニンの見解の検討

—

前節では、生産と「消費」に関するレーニンの見解を、ナロードニキ批判と合法マルクス主義者批判のばあいに応じて概観した。そうした彼の見解を、叙述上の便宜もかねて要約すれば、つぎの三点にまとめうる。

(一) 生産と「消費」の矛盾は、生産を無制限的に拡大しようとする傾向と制限された「消費」との矛盾である。それは、資本主義の本質にもとづく矛盾であり、資本家的生産の発展に固有なものである。この矛盾を過少消費説的

にとらえ、この矛盾にロシヤの資本主義的發展への障害をみているナロードニキの見解は誤っている。彼らが提起した問題——ロシヤ資本主義の形成と發展は可能か——に答えるには、實現理論によってではなく、主として農民分解に関する諸事実の階級的分析によって答えねばならない。

(二) 實現理論は、生産部門間における生産物の均衡的配分を前提にして、総資本の再生産と流通が価値と素材の面でどのように行われるかを分析する。しかし、均衡的配分を前提しているからといって、この理論は少しも生産と消費の矛盾を否定しない。この社会の基礎上では、均衡はたえざる不均衡をおしてのみ實現されるのである。トゥガン・バラノフスキーやストルウエにみられるように、この理論を生産と消費の調和の理論と解したり、『資本論』第三部の「矛盾」に関する叙述と實現理論とがまったく相反すると主張することは、完全な誤謬である。抽象的な實現理論を叙述するさいにも、實現過程に固有な諸矛盾を示すべきである。

(三) 實現理論の科学的価値は、ひとつにはそれが生産と消費の矛盾を前面におしだし、この「矛盾」を説明していることにある(引用6)。この理論から、総資本の均衡ある再生産が行われるばあいでは、生産の増大と「消費」の制限された限界との矛盾は不可避だという結論がでてくる(引用7)。この矛盾は、生産手段生産が消費手段生産に先行せねばならず、また後者より一層急速に増大するという——實現理論からの「主要な結論」——にあらわれている(引用2、11、12その他)。

あらかじめ、主要な結論をいえば、以上の三つの要点中、(一)と(二)、つまり以上のようにまとめる限りでのナロードニキと合法マルクス主義者への批判は、疑いもなく正しい。ここにみられる主張は、当時のロシヤにおけるマルクス主義経済理論の水準を高めるうえでも、ひいては、彼が志向する革命運動を前進させるうえでも、貴重な意

義をもつものであった。

しかし、(三)の見解には同意しがたい。こうした見解は、いわゆる「再生産論」の課題と意義を拡張しすぎていて、この理論の課題と意義を正確に理解するうえで障害になるといわざるをえない。

「第二部」第三編「社会的総資本の再生産と流通」の課題はつぎの点にある。すなわち、社会的総資本の価値と素材の面での必然的補填はいかに行われるか（生産物の価値分割が総生産物についてもどこまで妥当するか）ということとを、攪乱的諸作用を捨象して明らかにし、いわゆる「VプラスMのドグマ」を批判することにある（レーニンのはあいにも、こうした把握は的確に示されている）。したがって、ここでは、生産と「消費」の矛盾の主要側面たる生産力の発展は度外視され、したがってまた、この「矛盾」に関する考察も固有の課題からはずされている。このことは、實際上で、「矛盾」に関する直接的叙述が「再生産論」の草稿中に存在しないことをみても明らかである（以上の詳細は、本拙論「前編」第三節を参照されたい）。

それにしても、レーニンが、実現理論は生産と「消費」の矛盾が「どのように実現されるかを示した」とか、この理論から「矛盾が不可避だという結論が生ずる」というばあい、それはどういう意味においてであろうか？ 主としてそれは、生活手段（部門）に対して生産手段（部門）が先行して増大し、より急速に増大していくことが、「それに照応する消費の拡大のない生産」であり、生産と「消費」の矛盾をあらわすものだという意味でいわれている。実現理論では、消費資料に対して生産手段が先行的に拡大する法則、あるいは（それにもとづく）生産手段の急速な増大法則が説明されており、生産と「消費」の矛盾はこの法則にあらわされている、こうした点にこの問題に関するレーニンの見解の特徴があるといえるであろう。

そこで以下では、彼のこうした見解を、生産手段の先行的拡大法則が生産と「消費」の矛盾を意味するという論述と、生産手段の急速な増大法則にこの「矛盾」があらわされているという論述とに分けて、検討していくことにする。

## 二

拡大再生産における生産手段の先行的拡大法則が生産と「消費」の矛盾のありかたを示し、この矛盾を意味するという見解について。この見解は、つぎの諸叙述に示されている。

引用8 「蓄積は、実際に、所得（消費資料）に対する生産の超過である。生産を拡大する（……『蓄積する』）ためには、まず始めに生産手段を生産することが必要である。だが、そのためには、生産手段を生産する社会的部門の拡大が必要であり、労働者をそこへ吸引することが必要であるが、彼らは消費資料に対しても需要をもたらす。したがって、『消費』は『蓄積』のあとについて……発展する<sup>(31)</sup>」。「蓄積は所得以上にできる生産の超過であるということは……資本主義に固有な矛盾を表現している。この超過はあらゆる蓄積のばあいに必要なものである……」（引用2）。

引用9 「生産の拡大は生産的消費を前提する」ということから、……資本主義に固有な、またそれを必ず滅亡に導くべき、生産を無制限に増大させようとする志向と、消費の制限性との矛盾こそがでてくるのである<sup>(32)</sup>」。

引用10 「生産の（……）発展が、主として生産手段の増大によるということは、……疑いもなく矛盾である。これが、本当の『生産のための生産』、すなわち、それに照応する消費の拡大のない生産の拡大である<sup>(33)</sup>」。

引用11 「生産と消費との不一致……は（マルクスの表式で明確に示されているように）、生産手段の生産は消費資

生産と「消費」の矛盾（いわゆる内在的矛盾）について（後編）

料の生産に先行することができるし、また先行しなければならぬ、ということに現れている<sup>(34)</sup>。

これらの文章で生産と「消費」の矛盾だといわれていることは、マルクスの拡大再生産表式で説かれた「生産要素の機能上の組合せの変更」の法則にほかならない。つまり、拡大再生産は生産手段の拡大から始めねばならず、そのために、部門Ⅰで部門Ⅱの生産手段として機能していた生産物の一部分を、Ⅰの拡大用として機能させ、それに応じてⅡにおける生産物の機能上の比率をも変更させねばならない、という法則である。

右の法則自体は、資本主義社会に限らず、どの社会の拡大再生産にも妥当する。いかえれば、どんな社会でも、拡大再生産を開始するさいには、レーニンのいうとおり、「最初に生産手段を生産することが必要であり」、「生産的消費を前提」せねばならず、「生産手段の生産は消費資料の生産に先行しなければならない」のである。だから、生産と「消費」の矛盾は右の法則に現われるとか、この法則そのものから「矛盾」が生ずるといふ見解には同意しがたい。同様に、「蓄積は所得（消費資料）に対する生産の超過」だといふことが、「生産のための生産」であり、生産と「消費」の矛盾を表現するという主張にも、同じ理由から肯定できない。

マルクスの表式的説明で「蓄積が所得以上の超過」だといふのは、どういう意味においてであろうか？ 念のために、マルクスの表式でたしかめておこう。

〔A〕 単純再生産表式

$$I \quad 4000C + 1000V + 1000m = 6000$$

$$II \quad 2000C + 500V + 500m = 3000$$

部門間の補填  $I (1000V + 1000m) = II 2000C$



〔B〕 拡大再生産表式 (出発式)

$$I \quad 4000C + 1000V + 1000m = 6000 \quad (\text{蓄積率} 50\%)$$

$$II \quad 1500C + 750V + 750m = 3000$$

$$I \text{ での蓄積} \quad 400C + 100V \quad II \text{ での蓄積} \quad 100C + 50V$$

$$\text{部門間の補填} \quad I (1000V + 500m) = II 1500C$$

$$\text{年度末} \quad I 4400C + 1100V + (500m) = 6000$$

$$II 1600C + 800V + (600m) = 3000$$

第二年度(始)

$$I 4400C + 1100V + 1100m = 6600$$

$$II 1600C + 800V + 800m = 3200$$

右の拡大再生産表式では、生産手段の価値総額(8000)に対して消費手段の総額は、単純再生産とくらべて縮小させられずに同額(3000)とされており、ただその内的比率だけが変更されている。なぜなら、このばあいには問題なのは、二つの総量の絶対的比率ではなく、Iの諸要素の異なる組合せ——「それなしには拡大再生産が行われえないような変化した組合せ」(マルクス)——だけだからである。つまり、単純再生産の与えられた量ではなく、その質的規定のいかなる変化が、それ以降の拡大再生産の物質的前提になるのかの問題だからである。また、労働者階級の所得になるV部分も、消費手段の価値総額は不変であるのに増加(I 1100V, II 800V)させられているが、それは、生産手段(C)の蓄積にともなつてVの追加も行われねばならないからである。

だから、マルクスの拡大再生産表式(第一年度)において蓄積が所得以上の超過だということは、つぎの意味では主張しえない。すなわち、単純再生産とくらべて生産手段総額が絶対的にも比率的にも所得総額を超過するとか、あるいは、不変資本の増額にもかかわらず労賃部分が不変かまたは減少させられる、という意味では主張できない。蓄

積が所得以上の超過だと主張しうるのは、部門Ⅰでの生産手段の蓄積(500m)に依じてそれと交換されるはずであった消費資料の一部(Ⅱ500C)が縮小させられるので、従来のように $I(V+m) = II C$ ではなく、 $I(V+\frac{1}{2}m) = II C$ ——したがって、 $I(V+m) > II C$ ——にならざるをえない、という意味においてである。そして、このこと自体は、均衡ある拡大再生産をもふくめて、どの拡大再生産においても不可欠な条件にほかならない。したがって、このこと自体が、固有な意味での、すなわちレーニンが生産と「消費」の矛盾と解する「蓄積のための蓄積」、「生産のための生産」になるのではない。

したがってまた、「実現は、消費資料によるよりもむしろ生産手段によって、より多く行われる、——これは明らかにマルクスの表式からそうなる。だが今度は、このことから不可避的に、『生産力は発展すればするほど、消費関係がよって立つ狭い基礎とますます矛盾するようになる』(マルクス)ということがでてくる」(引用12)<sup>(35)</sup>、という主張も納得しがたいものといわざるをえない。マルクスの表式で説かれる限りでの、「実現は消費資料よりも生産手段によってより多く行われる」という意味が、さきに明らかにしたとおりであるとすれば、「このことから不可避的に」、生産と「消費」の矛盾をひきだしえないことは明白だからである。

- (31) 『全集』第二巻、一三六―七ページ(訳、一三八ページ)。
- (32) 同第四巻、一六八ページ(訳、一九七ページ)。
- (33) 同第三巻、三二ページ(訳、三二ページ)。
- (34) 『全集』第四巻、一四四―五ページ(訳、一七五―七六ページ)。
- (35) 『全集』第四巻、一四四―五ページ(訳、一七六―七六ページ)。

レーニンの叙述には、生産手段の先行的拡大法則と結びついた生産手段（部門）の急速な増大法則に生産と「消費」の矛盾があらわれている、という主張もみうけられる。

引用13 「発展しつつある資本主義社会では、社会的生産物のこの部分（IC部分——水谷）は、必然的に残りのすべての部分よりも急速に増大しなければならない。この法則によってのみ、資本主義の最も深刻な矛盾の一つが、即ち、国民の富の増大は非常に急速に進んで行くのに、人民の消費の増大は（……）きわめて緩慢にしか進まないということが、説明されうるのである」<sup>(36)</sup>。

引用14 「……国内市場の問題について、マルクスの実現理論から出てくる主要な結論は、つぎのとおりである。資本主義的生産の、したがってまた国内市場の発展は、消費資料の増大によるよりも、むしろ生産手段の増大によって行われる……／＼。したがって、社会的生産のうち生産手段を製造する部門は、消費資料を製造する部門よりも急速に成長しなければならない。だから、資本主義のための国内市場の成長は、個人的消費の増大からはある程度まで『独立して』生産的消費の増大によってより多く行われる」<sup>(37)</sup>。

引用15 「実際に、実現の分析は、資本主義のための国内市場の形成が消費資料によるよりもむしろ生産手段によつてすすむことを示した。このことから、社会的生産の第一部門は第二部門よりも急速に発展……しなければならぬ、ということになる。だが、もちろん、だからといって、生産手段の製造が消費資料の製造からまったく独立して……発展することができるということには決してならない。……／＼終局においては、生産的消費（……）は、つねに

個人的消費と結びついており、つねにそれに依存している。ところが、資本主義にとつては、一方では、生産的消費の無制限な拡張に対する志向……が固有であるが、他方では、人民大衆のプロレタリア化が固有であり、このプロレタリア化が個人的消費の拡張に対してかなり狭い限界をもうけるのである<sup>(38)</sup>。

以上の引用文やその他の論述から明らかのように、生産手段（部門）の急速な増大法則は、つぎの意味での部門間の不均衡的發展と把えられている。すなわち、生産手段（部門）は終局的には消費資料（部門）の狭い限界に制約されているにもかかわらず、さしあたり前者は後者を無視して發展していくという部門間の不均衡な發展として把えられている。そして、そのことに生産と「消費」の矛盾があらわれている、という見解がのべられている。

しかし、生産手段（部門）の急速な發展法則自体は、右の意味でいわれている両部門の不均衡的發展に直接イコールだとはいえない。レーニンも指摘しているように、右の法則自体は、生産力の發展における有機的構成高度化の別様の表現にすぎず、右の法則を表式的に示すばあいには、それぞれの部門なり諸成分における補填は、均衡的で並行的に行われるものとされているからである<sup>(39)</sup>。

換言すれば、生産手段（部門）の急速な増大法則自体は、生産物諸成分の均衡ある実現を含みうる（構成高度化表式はその前提で表示されている）のであって、生産手段なり第一部門が、消費資料または第二部門の制約をさしあたり無視して無制限的に發展していく意味での不均衡あるいは矛盾をあらわしているとはいえない<sup>(40)</sup>。

なお、以上の点に関するレーニンの論述では、『資本論』第三部における「不変資本同志の流通は一応、個人的消費から独立している、云々」という文章が利用されているが、この文章の理解については、後でふれることにしよう。

(36) 『全集』第四卷、六四ページ(訳、八〇―八一ページ)。

(37) 『全集』第三卷、三二ページ(訳、三一ページ)。

(38) 『全集』第四卷、四五ページ(訳、五五―五六ページ)。

(39) 「生産手段が最も急速に増大するという命題は、この法則(CはVよりも急速に増大するという法則——水谷)を社会的総生産に適用していかえたものにすぎない」(『全集』第一卷、七一ページ、訳、八三ページ)。

なお、市場の発展という視角を別にして、もっぱら「再生産論」の視点からみるばあい、レーニンの有機的構成高度化表式の主要な意義はどういう点にあるだろうか？、それは、生産力の発展・有機的構成の高度化という進んだ条件下でも、再生産の諸法則が貫徹することを表式的に示すことによつて、この諸法則に関する理解を深めるのに役立つ点にあるといえよう。しかし、この表式からは、本文で明らかにしたとおり、生産と「消費」の矛盾を導出することはできない。

(40) この点に関しては、すでに、富塚良三氏らの指摘がある(『恐慌論研究』、「再生産表式論の意義と限界」、未来社刊)。ただし、「再生産論」と「矛盾」との関連についての理解は、本稿とは決定的に異っている。

#### 四

生産手段の先行的拡大の法則にせよ、その急速な増大の法則にせよ、それら自体によつて生産と「消費」の矛盾が表示されえない、こうした点でレーニンの主張には同意できないことを明らかにしてきた。

ところで、彼がそのように主張しているのは、総資本の再生産に関するどんな法則も、資本主義的蓄積を基礎としている限り、蓄積の矛盾をあらかじめ明ものだと考えているからであろう。

事実、彼にあっては、往々、蓄積の敵対的矛盾(『資本論』第一部第七篇)と、生産と「消費」の矛盾とはほぼ同じものとして説かれており、さらに、これらの矛盾は、資本家的生産様式の基本的矛盾のありかたとしてもとらえられているようである。(42)

生産と「消費」の矛盾(いわゆる内在的矛盾)について(後編)

したがって、再生産の諸法則も、蓄積の矛盾に規定されたものとしておけば、その点を明示するかどうかは別にして、生産手段の先行的拡大や急速な増大法則に生産と「消費」の矛盾のありかたを見出したり、これらの法則を右の「矛盾」だということができる。いわばこういうかたちで、この問題についての論述を展開した彼の意図は、再生産の法則を均衡条件とのみ誤解してそこに何の矛盾も見出さない見解や、仮に見出しえても、その矛盾を資本主義的發展への障害とみるような見解に対して、それらの法則は資本主義的法則である限り、蓄積の敵対的本性に規定されたもので最初から矛盾を内包しており、資本主義的發展に照応したものだということを明示する点にあったといえよう。そうだとすれば、こうした意図も、その叙述の多くも、明らかに正しいものである。

しかし、いまここで問題にしていることは、「第二部第三篇」の諸法則を資本家的蓄積の矛盾という視角からとらえるかどうかということではない。問題は、ここでの諸法則を、蓄積の矛盾なり、生産と「消費」の矛盾なりという観点から「前面に押出して」考察することに、「第二部第三篇」の意義（任務）の一つを求めてよいかどうかにある。あるいは、この篇で、法則を矛盾として把えるばあいには、それをどういう視角からみた矛盾として把えるべきか——この点を「第三篇」の課題と対象との関連でどう考えるのか——という点にある。そしてこうした点は、すでに本稿前篇の第三節で解決したとおりである。

いわゆる「再生産論」では、生産と消費が不一致に落ち入らざるをえない原因や、生産力の発展と制限された「消費」との矛盾の態様は、固有の課題とされていない。蓄積の敵対的矛盾自体も、すでに分析されたこととして、そのありかたをも含めて、ここでは前提——直接の対象から除外——されている。対象である再生産の諸法則を純粹に析出したあとで、前述したレーニンのような指摘が必要になるばあいも大いにありうるとしても、だからといって、こ

の篇の一大眼目が「矛盾」の解明になるわけではない。この点で、「第二部第三篇」の意義は生産と「消費」の矛盾を前面に押出し、この「矛盾」を解明したことにあるとか、実現理論やマルクスの表式から「矛盾」が不可避だという結論が生ずるといふレーニンの叙述は、彼の正しい意図にもかかわらず、「再生産論」の課題と意義を拡張しすぎているといたっているのである。

以上のようにのべたからといって、もちろん、「第二部第三篇」ではいかなる意味での矛盾もあつかわれていない、などとはいえない。マルクスのいうように、再生産のあらゆる法則は、絶えざる動揺を通じて貫徹し、再生産の正常な進行の諸条件は、それと同数の、正常でない進行の諸条件に、即ち恐慌の可能性に、一変する。ただし、均衡は——この自然発生的な形態下では——それ自身ひとつの偶然だからである。そして、均衡が偶然なり不均衡なりを通じて実現されること自体が、再生産における矛盾を意味している。この面からみれば、不変資本と不変資本との流通は、個人的消費に入らない限りでは一応はそれから独立しているが、究極的にはそれによって制限されている云々、という「第三部」の叙述も、一面では、生産と消費における相互依存と独立性という矛盾を示しているといつてよい（この叙述は他面では、個人的消費がICおよびIのWの再生産をいかに制約しているかということ、再生産の必然的条件として示している）。

しかし、こうした矛盾は、恐慌の究極的根拠として「第三部」であつかわれている生産と「消費」の矛盾とは、その次元なり視角を異にしているのであって、生産と「消費」の矛盾の方は、「再生産論」では「前面に押出されて」解明されていないし、そういう解明は課題になっていないのである。

なお、「第一部」における蓄積の敵対的矛盾の考察は、直接的生産過程で把握しうる限りでの労働者階級の運命、

ひいては体制変革の条件の解明、という視角を特徴にしている。これに対して、「第三部」における生産と「消費」の矛盾は、恐慌との関連、商品資本の実現面における生産への制限（利潤率による制限のこの面での貫徹）作用という視角を特徴としている。前者（第一部第七篇）にあっては、後者（第三部第三篇）のこうした視角は度外視され、労働者階級の状態の悪化も、給与の如何に無関係なものとしてあつかわれている（詳細は拙論前篇第一節）。したがって、蓄積の敵対的矛盾を、生産と「消費」の矛盾と直接に同じ矛盾（同一視角のもの）と考えることはできない。したがってまた、蓄積の敵対的矛盾を前提しておきさえすれば、生産手段（部門）の先行的拡大やより急速な増大という法則が、自から生産と「消費」の矛盾を意味するということも主張できない。

(41) たとえば、『全集』第四卷、一四三ページ（訳、一七五ページ）。同第三卷、一三七ページ（訳、一三八ページ）。

(42) 前掲箇所参照。資本家的生産様式の基本的矛盾は、一社会の歴史的性格と新社会への移行を指示する視角から、生産（力）と生産関係の対立関係を一般的に示すものである。

「……労働過程のあらゆる規定された歴史的形態は、この過程の物質的基礎および社会的形態をさらに発展させる。特定の成熟段階に達すれば、一定の歴史的形態は脱却されて、より高い形態に席をゆずる。かかる危機の時機が到来したということは、一方で分配関係したがってこれに照応する生産関係の規定された歴史的形態と、他方では生産力……とのあいだの矛盾および対立が広くなり深くなったときに、明らかになる。そこで生産の社会的形態との衝突が生ずる」（K. III, s. 891）（訳、二九ページ）。

この矛盾を「基本的矛盾」という以上、それがさまざまな側面で貫徹し、種々なあらわれ方をするのは論をまたない。だから、当面する生産と「消費」の矛盾をその一面であるといってもよい。しかしだからといって、「再生産論」で生産と「消費」の矛盾のありかたが固有の研究対象をなすとはいえない。この点は、すでに本文で考察してきたことからみて明瞭だと考

える。



いままでは、便宜的に、生産手段の先行的拡大と生産手段の急速な増加の法則とを、別々にわけながらレーニンの見解を検討してきた。しかし、レーニンは、右の二法則を事実上で同じもの、あるいは生産手段の急速な増大法則をその先行的増大法則の必然的帰結ととらえて「矛盾」に関する彼の見解を主張している。

ここで、つぎの、一見したところ相反するようにみえる二つの文章に注目されたい(ゴチックは水谷)。

①「さきあげたマルクスの表式(拡大再生産表式——水谷)からは第二部門に対する第一部門の優位という結論は、いささかも引きだすことはできない。そこでは両部門は並行して発展している」<sup>(43)</sup>

②「実現は、消費資料によるよりもむしろ生産手段によってより多く行われる、——これは明らかにマルクスの表式からそうなる」(前掲引用12)。

①では、マルクスの表式は第一部門の「優位」を示すことができないといわれているのに、②では、同じ表式からこの「優位」が示されるとのべられているようにみえる。①は「いわゆる市場問題について」(一八九三年)のなかに、②は「ペ・ネジダーノフ氏への回答」(一八九九年)のなかにみられる叙述である。九三年時の主張は、六年後に否定されるようになったのであろうか? このようなかたちで問題を提示するのは、マルクスの批判者にみられるごとく、前後の文章から切離した叙述で矛盾なるものをデッチあげてあげ足取りをするためではもちろんない。相反しているようにみえる文章の背後に、生産と「消費」の矛盾に関するレーニン独自の把握が伏在していて、それが右のようなかたちで示されていることを鮮明にしたいからである。また、つぎの例にみられるような無用の混乱をさけるため

もある。すなわち、ロスドルスキー——彼は近年『経済学批判要綱』の綿密な研究を発表するかたわら、『資本論』第二部第三篇の意義（特に第三部との関連）について、レーニンの見解を批判しているのであるが——彼は、①でも②でも同じ意味で第一部門の優位がのべられていると解して、レーニンを批判している。つまり、彼は他の叙述に加えて②の叙述を引用しつつ、「しかし、マルクスの表式は、実際に、そのようなこと（生産と消費との不一致——水谷）を示してはいない。というのは、第二巻のどちらの例においても、部門Ⅱは部門Ⅰとまったく同様の速さで発展するからである」とレーニンを批判しているのである。<sup>(44)</sup>

さきの疑問には、さしあたり、つぎのように答えることができる。①では、生産手段のより急速な増大という点で部門Ⅰの優位性が問題にされている。その限りで、有機的構成の高度化を捨象したマルクスの表式で、右の急速な増大を表示しえないのは当然である。これに対して、②では、より速いかどうかは度外視されている。そこで問題にされているのは、単純再生産から拡大再生産への移行時における補填の条件（各生産物の機能上の組合せの変化）——つまり、消費手段に対する生産手段の先行した拡大の必要性である。②では、この必要性（先行的拡大の法則）が、マルクスの拡大再生産表式で表示されうるといわれているのである。このことは、②の直前で、「生産と消費との不一致は（表式で明確に示されているように）、生産手段の生産は消費資料の生産に……先行せねばならない」とのべられていることから明白である。（したがって、先述のロスドルスキーのレーニン批判は、この点では見当違いといえる）。

①と②という二つの文章だけをとりあげ、その関連を以上のように解すれば、さきの疑問は解決する。それでは、つぎの文章はどうであろうか？

生産手段（IC）は「他のすべての部分よりも急速に増大しなければならない。この法則によってのみ」（Ленино  
и Сталина）、「資本主義のもっとも深刻な矛盾の一つ」（生産と「消費」の矛盾——水谷）が説明されうる」（前掲引用13）。  
生産手段の急速な増大法則は、有機的構成の高度化を導入する限りで表式的に示されうる。だから、「マルクスの  
表式からは、第二部門に対する第一部門の優位という結論は、いささかも示すことはできない」（前掲）。だとすれば、  
生産と「消費」の矛盾は、マルクスの表式で直接表示しえない法則によってのみ説明できるといふ主張と、マルクス  
の表式そのものからこの「矛盾」が説明されるという主張とはどう整合するのだろうか？ こういう疑問が再び生ず  
ることになる。しかし、レーニンにあっては、生産と「消費」の矛盾は生産手段の先行的増大法則によっても説かれ  
ているから、生産手段のより急速な増大法則によつてのみ云々というさきの文章は、急速な増大法則の「矛盾」に対  
する意義を強調するためのもので、この法則によつてしか説けない、という意味でいわれているわけではないと思わ  
れる。

それにしても、以上の諸論述を全体としてみていくと、レーニンが生産手段（部門）の急速な増大法則と生産手段  
（部門）の先行的増大法則とを、同じ生産と「消費」の矛盾のあらわれとしてとらえていることがわかる。いいか  
えれば、「急速な増大法則」を「先行的増大法則」の必然的延長線上でとらえ、事実上で、同じ矛盾のありかたを  
示すものと考えていることがわかる。

レーニンの生産と「消費」の矛盾に関する諸論述をみていくとき、それらが時として相反するかのよう<sup>1</sup>にみえたの  
は、畢竟、個々の叙述では二法則が一つずつ別個にあつかわれていたり、彼の構成高度化表式とマルクスの表式とが  
区別されている点では、二つの法則が区分されているようにみえるけれども、他方で、それらを明確に区別しないま

ま、それらが同じ「矛盾」を意味し、その解明が同一の「矛盾」の解明として説かれているからであらう。

しかし、二つの法則は、明らかに相異なる法則である。また、後者は前者の必然的帰結ではありえない。

「先行的拡大法則」では、拡大再生産の物質的前提として不可欠な、生産物諸要素における質的規定の組合せの変更にだけ問題にされる。これに対して、「急速な増大法則」では、生産力の増加が生ずる限りで、右の諸要素のうちどの成分がより急速に増加するかが問題になる。すなわち、前者のばあいには、ある継続期間における各要素の増加速度の比較は問題にならず、生産力の変化も有機的構成の高度化も度外視されている。だから、前者の法則を表示するマルクスの表式からは、いささかも後者を結論しえぬことになる。これに対して、「急速な増大法則」は、右の契機を導入することによってのみ表示されるのであり、したがってまた、後者は前者が明らかにされたあとで生ずる固有の問題といわねばならない。ある期間、有機的構成の高度化なしに拡大再生産が行われるとすれば、前者は必然的に貫徹せざるのえないのに、各要素（または部門）の増大速度は変化しないのであって、前者が与えられれば、ただちに後者が不可避免的に生ずるわけではない。もちろん、双方には関連性もある。多少とも長期的な過程をみれば、拡大再生産過程は同時に生産力の発展を内包しており、したがって、生産手段の先行的拡大は自からその急速な増大過程としてあらわれざるをえないからである。ただ、こうした関連性があるからといって、それらの区別を看過し、双方を同一視してはならない。

(43) 『全集』第一巻、六九ページ（訳、八〇ページ）。

(44) R. Rosdolsky "Zur Entstehungsgeschichte des Marxschen Kapital", s. 560 『資本論成立史』第四巻、五六〇ページ。時永・平林・安田訳（法大出版）、第四分冊、七一―七二ページ）。

レーニンの見解で検討しておくべきもう一つの点は、搾取の条件と実現の条件に関する『資本論』第三部における文章と「再生産論」との関連を、当面の視点からどう把握すべきか、という点である。

「第三部」では、搾取の条件と搾取の実現の条件とは一致せず、前者は社会の生産力で制限されるだけであるのに、後者は、生産部門間の均衡関係および社会の消費力によって制限されることが示されている。レーニンは、「第三部」における右の文章に関するトゥガンの解釈を批判している（ゴチックは水谷）。

引用16 「トゥガン氏は、この言葉（搾取の実現条件は諸部門間の比率性と社会の消費力によって制限される」という叙述——水谷）をつぎのように解釈する。『国民的生産の配分が均衡しているということだけでは、生産物の販売の可能性はまだ保障されていない。たとえ、生産の配分が均衡をえていても、生産物は自分のために市場をみいだすこととはできない、……』と。いや、この言葉の意味はそういうことではない。第二部でのべられた実現理論に対するなんらかの修正をこの言葉のうちにも見るべき根拠は、少しもない。マルクスはここでは、……生産を無制限に拡張しようとする志向と制限された消費の必然性（……）とのあいだの矛盾を確認しているにすぎない。／……『社会の消費力』と『相異なる生産部門間の均衡性』、——これは決して、個々の自立した、相互に関連のない条件ではない。それどころか、消費の一定の状態は均衡性の一要素である」<sup>(45)</sup>

ちなみにロスドルスキーは、部門間の均衡関係と社会の消費力に関する右のトゥガンの解釈を支持し、レーニンを批判している。<sup>(46)</sup> 均衡概念を最後まで維持する限り、そこに生産と消費の均衡が含まれるが、だからといって双方をつ

ねに相関的なものとみるのは正しくない、というのである。<sup>(47)</sup>しかし、はたしてそうであろうか？

トゥガンは、部門間の均衡関係と社会的消費力とを、実現制約の相関的関連と解さず、不均衡と消費力の不足とを「販売不振の独立した原因」<sup>(48)</sup>あるいは相反する関連とのみ解した。だから彼は、実現理論は部門間の均衡関係の分析と一致し消費力不足の考察とは相反すると考え、この点に、「第二部」と「第三部」との矛盾を発見したのである

（本稿五八ページ参照）。

個人的消費を、部門間均衡の一要素ととらえるばあいには、この均衡の維持は、一面では、生産的需要と個人的需要との一致や生活手段の需給バランスをふくむものと考えねばならない。ただし反面では、この均衡は、そのあらゆる構成要素のたえざる不均衡を通じて実現される過程としてもとらえねばならない。換言すれば、右の諸要素の不断の不均衡なり対立の諸過程のなかに、傾向として、一定の比率性なり均衡が認められるのである。

「第二部第三篇」で、部門間の均衡が前提されているのは、そこでの対象を純粹に分析するための手続きとして必要だからである。だからといって、この理論は、現実的過程における生産と「消費」の不一致を始め、部門間の不均衡を少しも否定するわけではない。この点では、部門間の比率性と個人的消費とを実現制約の相反する関連においてのみとらえ、「再生産論」と「第三部第三篇」の前掲叙述とのあいだに矛盾があるとしたトゥガンにこそ、誤りがあるのであって、このことを突いたレーニンの方が正しいといわねばならない。しかも、レーニンが「消費も均衡の一要素だ」としてトゥガンを批判しているからといって、ロスドルスキーのいうように、レーニンが前述した限りでの二要因の対立面を看過していたことには少しもならない。彼は、不均衡を通じて均衡が実現される点にも、実現理論における矛盾の意味を見出していたのであって、このことはすでにみてきた引用文から明白である。

実現の制約という面における部門間の比率性と個人的消費との関係は、一面ではレーニンの指摘したとおり、「消費の一定の状態は均衡性の一要素」だという関係にある。ただし、「消費」は単なる一要素であるだけでなく、最終的、基礎的要素だという関連を有している。つまり、部門間の比率性が不均衡なばあいには、部門間で商品の過不足・実現の困難が生ずるという点では、比率性は実現制約の一般的条件といえる。他方、社会の個人的消費力は本質的には利潤率に制約されており、しかもどの商品も結局、個人的消費と結びついてそれらを終点にしている点で、実現を制限する最終的で基礎的な条件なのである。

このように実現に対する個人的消費制限の意義は、この契機が部門間の比率性の一要素だということだけにとどまらない。生産力の無制限的發展衝動に対して、利潤率に規定された個人的消費制限は、右の生産拡張への最終的な基礎としての意義をもっているのである。いいかえれば、全般的恐慌・全面的な資本の減価と価値破壊の究極的基礎として扱われる右の制限に関する問題は、単なる部門間均衡の一要素という側面をこえた問題であつて、これは「第三部」で扱われねばならぬ性格のものである。<sup>49)</sup>

さきほどのレーニンの引用文で問題があるとすれば、それはただ、恐慌の究極的根拠という視角から取扱われる生産と「消費」の矛盾に関する問題は、実現理論で説明されていて「第三部」ではその説明が確認されているにすぎない、という把握がうかがわれる限りにおいてである。すでに考察したように（前篇第三節）、この問題は、実現理論においてではなく、「第三部」で始めて固有な問題として扱われているからである。

したがって、「第三部」における例の搾取の実現条件に関する叙述のうちに、「実現理論へのなんらかの修正をみるべき根拠は少しもない」という主張も、つぎの意味——部門間の比率性と社会の消費力はいかなる関連で実現を制

約するかという問題は、すでに実現理論で生産と「消費」の矛盾として解明されてしまっているから、「第三部」の既述の叙述に右の解明を修正すべき根拠はない、という意味——でいわれているとすれば、同様に肯定できない。さらに、右の修正という意味が訂正という意味ではなく、より進んだ説明という意味で用いられているとすれば、なおさら肯定できなくなる。なぜなら、個人的消費は利潤率によってどのように制限されるのか、労働者階級の消費はその他の収入諸形態とどのように関連しつつ生産拡張への制限をなすのか、という問題は、「第三部」以降で明らかにされるべき問題だからである。<sup>(50)</sup>

(45) 『全集』第四卷、四四ページ（訳、五五ページ）。

(46) 前掲、ロズドルスキー『資本論成立史』五六三ページ（訳、七一四ページ）。

(47) 前掲、五六三—五六五ページ（訳、七一四—七一七ページ）。

(48) この言葉をふくむトゥガンの文章は、本稿第二節の二に提示されている。

(49) マルクスのつぎの叙述には、部門間の均衡関係と個人的消費の意義に関する以上の理解がふくまれていると解しうる。

「全社会が、ただ産業資本家と賃労働者だけで構成されているものと考えてみよう。さらにつぎのような価格変動、すなわち、総資本の大きな部分がその平均的な割合で補填されることを妨げるような、またことに信用によって発展する再生産過程全体の一般的関連のもとでは、つねに一時的な一般的停滞をひき起さざるをえないような、価格変動は無視することによろ。そうすれば、恐慌は、ただ、さまざまな部門における生産の不均衡だけから、また、資本家たち自身の消費と彼らの蓄積とのあいだの不均衡だけから、説明されるはずであろう。けれども実際のところは、生産に投下されている資本の補填の大きな部分は、生産的でない諸階級の消費能力にかかっているのであり、また他方、労働者たちの消費能力は、ひとつには労賃の諸法則によって制限されており、ひとつには、彼らは資本家階級のために利潤をもたらすように充用される限りでしか充用されない、ということによって制限されているのである。すべての現実の恐慌の根拠は、どこまでも、資本主義的生産の衝動に対比しての、すなわち、あたかもその限界をなすのはただ社会の絶対的な消費能力だけであるかのように生産力を発展させようとする衝動に対比しての、大衆の窮乏と消費制限なのである（K, III, s. 500—501, 訳、六一八—九ページ）。



(50) ロスドルスキーは、「第二部」と「第三部」に矛盾はないというレーニンの主張を肯定したのち、つぎのようにのべている。

「それにしても、第三巻の詳論は、第二巻の分析のいっそう進んだ段階を示しており、この段階で問題だったのは……恐慌と資本主義に内在的な崩壊傾向との分析だったのである。このことから、当然、再生産表式および第二巻の分析はけっしてただそれだけで表現理論の『完全な解明』を与えうるものではなく、マルクスの恐慌論や崩壊理論といっしょになってはじめて表現理論の『完全な解明』を与えうるのだ、という結論が出てくる。そして、まさにこの基本的な認識を見落した点にこそ、レーニンの表現理論の最大の欠陥があるように思われるのである」(前掲、五六九ページ、訳、七二一—七二二ページ)。

生産と「消費」の矛盾が「第二部」の対象でないという限りでは、この主張は拙論の見地と一致する。しかし、表現理論のあるべき範囲と性格については根本的に相違しているように思われる。表現理論は、恐慌論や崩壊論と一語になってはじめて完全な解明になるということは、表現理論が恐慌や崩壊傾向の分析をその範囲に含んでいることを意味している。彼は、表現理論における「実現」を、マルクスやレーニンとは異って、販売ととらえ、しかも、表現理論の性格を均衡論的に解することによって、この理論の領域を右のように拡大してしまったのだと考えられる。しかし、「再生産論」で正確に提起された課題と対象はレーニンのいうとおり、そこで完全に解明されているのである。

### むすびにかえて

レーニンは、多くのばあい、「再生産論」の課題と内容を的確に示している。ただ、往々、生産と「消費」の矛盾の不可避性がマルクスの表式的説明から導きだされると主張したり、「再生産論」の意義の一つはこの「矛盾」を前面に押し出してそれがいかに実現されるかを示すところにあるとか、『資本論』第三部第一章における「矛盾」に関する叙述ではこの「矛盾」が確認されているにすぎない、と主張している。

生産と「消費」の矛盾(いわゆる内在的矛盾)について(後編)

こうした主張は、「再生産論」の課題と意義を拡張しすぎたものであり、彼の右の主張の主要な内容——たとえば、生産手段の先行的拡大法則自身を生産と「消費」の矛盾あるいはそのありかたとするという見解もその一つであった——とともに支持しがたいものである。以上が、本稿のごく一般的な結論である。

彼の右の主張は、九〇年代におけるロシア資本主義論争の前半期、ナロードニキの批判に主力が注がれた時期には、それほど積極的に明示されなかった。そうされるようになったのは、トゥガンら合法マルクス主義者たちを批判するようになった後半の時期においてである。トゥガンらは、「再生産論」を生産と消費の均衡理論ととらえ、この理論と「第三部第一章」の叙述とは矛盾するものだとしてレーニンを批判した。そこで、「再生産論」は生産と「消費」の矛盾を少しも否定していないことを示して彼らを反批判する必要が生じたのであって、このことが、レーニンのあのような見解を提示させるひきがねになったと思われる。こうした点からみれば、彼の見解は、トゥガンらの批判にさいして派生した一種の「勇み足」的な誤りということもできる。

他方、彼の見解をもたらした主要な原因はどこにあるのだろうか？、それは、『資本論』第二部の一叙述——「矛盾」に係わる指摘のあとで、「これは次篇で始めて問題になる」と記された注意書き的な叙述（第二篇第一章、注三三）——をみ、これをして、「第三篇」は「矛盾」の考察を行う指摘だと解してしまつたことにある、と考えられる（彼がこのように解したことは、右の叙述の利用に関して、ダニエリソンを批判した文章へ引用1、3√にも示されている）。

だが、こうした解釈がはずれだということは、前篇第三節で詳論したように、第二部原稿のオリジナルテクスト（第一稿、第二稿）の比較考証面からも明らかである。もっとも、レーニンのばあいには、さきの叙述部分だけを本文から切離して注へ移行した現行版だけに依拠せざるをえなかつた事情や、『剰余価値学説史』もみられなかつたこ

とからすれば、そのような解釈をしてもやむをえなかった面もある。

それにしても、彼の見解は、わが国では多くの人々によってうけつがれ、今日もなお、有力な見解として再生産さ  
れている。いな、単に再生産されるだけにとどまらず、より多くの誤りや読み込みをふくんだかたちで拡大再生産さ  
れ、現状分析あるいは一国資本主義分析への理論の応用という面にも、逆の効果を及ぼしているようにみえる。わが  
国のこうした見解の主発点となった彼の見解を、これまでにえられた研究成果によりながらあらためて検討しなす  
ことよって、本拙論が、理論の体系的把握とその応用における「再生産論」の意義と限度とを正しく把える一助に  
なれば幸いである。

(完)

(一九八〇、一一、二八)

【訂正】、前篇第二節三(三四卷第二号、二二ページ)で、「 $V$ が15000 ( $I V + II C$ )」とされているのは、1500 ( $I V + II V$ )  
のミスプリントなので訂正します。